

# 『正信偈』に親しむ ⑥

【本文・読み方】

【現代語訳】

能発一念喜愛心  
のうほついちねんきあいしん

よく一念喜愛の心を発すれば

信じ 喜び 愛する心が  
ひとたびおこる時

不断煩惱得涅槃  
ふだんぼんのうとくねはん

煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり

煩いや悩みを断たなくても  
仏のさとりを得ることがで  
きるのです

凡聖逆誘奇廻入  
ぼんしょうぎやくほうさいえにゅう

凡聖、逆誘、ひとしく  
えたぎゅう  
廻入すれば

凡人も 聖者も 逆らう人も  
けなす人も ひとたび心を  
ひるがえせば みなひとし  
く救われるので

如衆水入海一味  
にょしゅうすいにゅうかいいちみ

如水、海に入りて一味  
なるがごとし

あたかもさまざまの水が  
みんな大海に入つて一つに  
とけあうようなものです。

## 【解説】

煩惱具足の私<sup>ぼんのうぐそく</sup>がたすけられていく！

親鸞聖人は、弥陀の本願<sup>みだ ほんがん</sup>のはたらきを海にたとえておられます。川から流れ込んださまざまな味の水(煩惱に苦しむ私たちの心)が、お念仏の教えにふれることで、やがて海の水として一つの味に変えられてしまうのだと。私たちはご縁<sup>えん</sup>のある他者<sup>たしや</sup>とともに生きてい

ます。ところが、いつも自分を中心に考えるものですから、そこに欲<sup>よく</sup>や怒<sup>いか</sup>りが出てきて、他者との間に摩擦<sup>まさつ</sup>を起こすこととなります。

ところが、阿弥陀仏の本願は「えらばない」「きらわれない」「切りすてない」「世界なのです。

本願のはたらきに出遇<sup>であ</sup>つて、煩惱具足のわが身を知らされることになるのです。ここには

じめて、私たち自身がその凡夫<sup>ぼんぷ</sup>の身を「これが私<sup>わたし</sup>です」と謙虚<sup>けんきょ</sup>に受けとめることができる道が見つかることになるのです。(次号に続く)

## 聞く世界—お香とお念仏—

仏事にかかせないものに、香があります。香を焚くことは、中国から仏教とともに伝わったとされます。お内仏のお給仕では燃香(線香)し、年忌法要では焼香をします。

香を焚くと、匂いに包まれそれが身に移りさらに自分の香りにまでなるようです。香道では、香は嗅ぐと言わず「聞く」といいます。

ところで、お経には、「聞其名号<sup>もんごみょうごう</sup> 信心歡喜<sup>しんじんかんぎ</sup>」とあり、お念仏を聞くことで信心が得られる



と教えています。永年お念仏(南無阿弥陀仏)を称えていると、称える声<sup>こゑ</sup>が身を包みやがて身に染みこむとも聞きます。日頃のいそがしさにまぎれ、本来の生き方を見失いがちな私に気づかそうとしているのでしよう。

仏法を聞かねばと言いつつ、すぐに忘れてしまう自分がいます。せめて香の匂いに包まれているときぐらひは、仏さまの御恩を思い出したいものです。(y)

## 『いぶきの会』

三月二十八日(水)

午後七時三十分からです。

ぜひご参加ください。

## 編集後記

▽オリンピックを伝える映像に、クギ付けになりました。大変なプレッシャーを感じながら、世界の強豪と争う選手の真剣なプレーや表情には感動を覚えます。選手を支える関係者だけでなく、たくさんの人びとの励まし、努力があることを知らされるとき、「おかげさま」ということばが思い浮かびました。私たち一人ひとりを生み、育て、支える大いなるいのちのはたらきに手を合わしたい。これがお念仏の生活ではないでしょうか。